

感激をありがとう

もうすでに競泳種目が始まってからではありましたが、9月20日の夜、水泳部部長の松本道介先生を始め、評議員会議長の瀧野秀雄先生、学会会南甲倶楽部会長の高橋季義先生など、私を含めて、総勢12名がシドニーに旅立ち、3日間フルに水泳競技の日本選手諸君を応援して、24日の夜に帰ってきました。

時差がサマータイムを入れても2時間しかないのですが、いわゆる時差ぼけの恐れはないのですが、正味9時間ほどの空の旅はやはり疲れます。しかし、到着した21日の午前中は観戦切符が取れなかったので市内を少し

見て歩きましたが、その日の夕方から最終日、23日の夜まで、ホテルから歩いて5、6分ほどにあるCentral Stationから、直通電車で30分のOlympic Parkへ、午前の部の予選、夜の部の準決勝、決勝と、ただひたすら通って選手諸君を応援してきました。何せ広いオーストラリアですから、土地はたっぷりあるので、オリンピック公園は広大でした。メインスタジアムから水泳用のプール会場、野球場、ソフトボール球場、ホッケー場etc、何でも一緒に作ってあるお陰で、毎日1万歩は確実に歩いておりました。

水泳プール場内は、50mプールと飛び込み用プールを真ん中にはさんで、片方は報道陣、選手、競技関係者のお偉方がゆったりと使っていますが、観客のほうは、もう片方の1階から3階までの天井近くまで観客席が広がっています。ですから席が悪いと、デッドヒートの競泳の場合、はっきりした最後のゴール間際は自分の目で見るわけにいかず、電光掲示板で確かめるしかありません。その点はテレビ観戦が一番良く分かるでしょう。しかし、やはりなんとも言えず良いのは、現場にいるという、その臨場感、雰囲気を感じていくまで味わえることです。日本では良くサッカー場などで「ニッポン、チャチャチャ」と応援していますが、それぞれお国柄があって、「ユー・エス・エイ、ユー・エス・エイ」とアメリカ人観客がやると、圧倒的多数のオーストラリア人観客は「オージー、オージー、ホイ、ホイ、ホイ」とにぎやかなものでした。



学長
鈴木 康司

巨人族相手、スタートからハンデ

われわれは学会会の皆さんが用意して下さった、日の丸と中大の旗を一斉に振って、応援に精を出しました。松本先生と私は、もっぱら中央大学のマークがついた旗を、選手諸君が判るようにと振りかざしておりました。しかし、選手たちも、なにしろ巨人族相手の闘いのようなもので、スタートで飛び込んだ瞬間すでに背の高さ、手の長さによるハンディキャップを何10センチも背負うのですから大変でした。日本の水泳選手権中継などでは、男女を問わず素晴らしい体格の選手たちだと思いますが、オリンピックの舞台に立った時の彼らは、なんとスマートできゃしゃに見えることか。萩原選手は1m75cm

中大の 五輪水泳陣

田中 雅美(法4)平泳ぎ
中村 真衣(法3)背泳ぎ
源 純夏(法3)自由形

磯田 順子(法2)平泳ぎ
谷口 晋矢(法2)個人メドレー
ウ ヨ 徹(経4)自由形
チヨル
韓国代表

ですから十分太刀打ちできそうなものですが、アメリカやオーストラリア、オランダなどの選手と並ぶと、肩幅、厚みという点で、全く及びません。まして、男子選手の体格の差ときたら。水泳は柔道のように体重別とはいかなくても、身長別ぐらいのクラス分けがあっても良いのではないのでしょうか。それでも、「オリンピックは参加することに意義がある」なんておとなしいものではないことは、闘っている選手たちの表情を見れば直ぐ分かるわけですから、すごいものです。

それにもかかわらず、日本の選手諸君は健闘しました。もちろん、中大の選手たちも実に良く頑張ってくれたのです。中村真衣さんの銀メダルを始め、例えば、谷口君は自己ベストを更新して400m個人メドレーの決勝に残りましたし、源さんは日本女子選手として初めて100mの決勝に出たのです。かつて千葉すず選手が随分スポーツ新聞でちやほやされましたが、彼女はただの一度もオリンピックで決勝に残らなかったのですよ。それを思えば源さんの100m決勝、50m決勝進出は日本水泳史に残る快挙でしょう。

21世紀へ向け女性の強さ示した

それにしても、水泳最終日の400mメドレーリレーは盛り上がりしました。前夜の200m背泳決勝で、中尾美樹選手(近大)が銅メダルを取り、われわれの後ろの列におられた中尾選手の母上と握手して、あすもメダルをと言っていたのですが、とにかく4人のうち3人が中大生ですから、われわれの力のこめようも大変だったのです。最初の背泳で中村さんが出遅れた時にはどうなることかと思いましたが、田中さんも頑張り、バタフライの大西選手(ミキハウス)がかなり取り返し、最後の源さんで奇跡が起きました。我々応援団は総立ちで「純夏、純夏」の大合唱、最後の20mでの彼女の泳ぎは神がっていました。後から松本先生が「あの時、彼女の泳ぎに何が起きたのか、本人に聞いてみたい」と言われましたが、それほどすごいものでした。

電光掲示板に「3位日本」と出た時の嬉しかったこと。4人の選手が抱き合って感涙にむせんでいたのも美しい光景でした。表彰式の後で場内を一周する時、中大の旗に気づいて4人が手を振ってくれたのが印象的でした。はるばるシドニーまで来て良かったと思う瞬間だったのです。出口で源さんの母上にお会いして、握手攻めにしました。母上の嬉しそうな顔ときたら……。他の選手のご父母にはお会いできませんでしたが、きっと皆さん同じようなお顔をしていっしょだったに違いありません。

われわれ中央大学の仲間が日本を代表してはるばる南半球のシドニーで闘い、立派な成績を収めてくれたことに、学長として心から感謝し、喜びを共にしたいと思います。それにしても、今度のオリンピックでは、つくづく、21世紀の日本は女性の世紀だと感じ入りました。男性社会の日本で、長い間実力を認められなかった女性たちが、すべての人間の目にはっきり理解できる形で、その能力の高さを示した大会だったと思います。

